

令和3年度リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告書

参加会議： 第70回会議(3分野合同)

所属機関・部局・職名： 東京大学大学院医学系研究科 消化器内科学 特任臨床医

氏名： 關場一磨

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

ノーベル受賞者の講演は、研究内容の素晴らしさは勿論のこと、自身の研究への愛がひしひしと伝わってくる強く惹き込まれるものであった。研究内容だけでは、論文等でも学ぶことはできるが、こうしたノーベル賞受賞者の研究に対する姿勢というものをこれだけ濃密に学ぶのはリンダウ会議以外では難しいのではないかと感じた。また、どの受賞者もディスカッションにおいて若手研究者のことを尊重する真摯かつ謙虚な姿勢が印象的であった。実際にそうした姿を見て、今後の研究活動において自身が目指すべきロールモデルを見つけたような気持ちであった。

内容で印象的であったのは、Françoise Barré-Sinoussi (Nobel Prize in Physiology or Medicine in 2008 for the discovery of the HIV virus)と Harvey J. Alter (Nobel Prize in Physiology or Medicine in 2020 for the discovery of the hepatitis C virus)が今回の新型コロナウイルスについて語ったセッションであった。私自身も B 型肝炎ウイルスの研究を行ってきたこともあり、特に C 型肝炎ウイルス研究でノーベル賞を受賞した Alter 先生のことをリンダウ会議開催前から注目していた。パンデミックの甚大な被害に私自身も心を痛めている一方で、ワクチン開発の迅速さなど、パンデミック中には「基礎研究の力」というのを強く感じたが、Alter 先生も同様に一連の研究の力に敬意を抱いておられた。“Science is everywhere”と結んだ Alter 先生の力強い言葉が印象的であり、今後の私自身の研究へのモチベーションになった講演であった。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッションにおいて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

ノーベル賞受賞者とのディスカッションを楽しみにしていたが、今回は参加時間が限られてしまったため、コミュニケーションを直接取ることはできなかった。オンライン参加ということで、パソコン画面の前にいられるように努めたものの、臨床医としての側面も持つ私にとっては、東京にいる限りは、臨床業務から長時間完全に離れて会議に集中するということが困難であった。また、今回は米国留学を1週間後に控えた時期とも重なってしまったため、その渡航準備に追われてしまった。コロナ禍など無く、2020年に予定通り開催されていれば、どれだけ良かっただろうと強く感じた時期であった。

3. 諸外国の参加者とのディスカッションにおいて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

諸外国の参加者とのディスカッションを楽しみにしていたが、今回は参加時間が限られてしまったため、コミュニケーションを直接取ることはできなかった。前述の通り、臨床業務と海外留学準備が主な理由であったが、もう少し会議に集中できる時間を確保できると見込んでいた自分の見通しの甘さも痛感した次第であった。

4. オンライン形式でのリンダウ会議において、特に良かったと思うプログラム(イベント)を3つ挙げ、その理由も記載してください。

リンダウ会議の開催方式については、直前まで紆余曲折があった。2020年はパンデミックの影響で延期からの中止決定、2021年はオンラインと現地参加とのハイブリット開催が当初予定されていたが、直前にオンラインのみでの開催となった。そうした混乱の中、人と人が直接接することのできないデメリットを乗り越えるべく、運営事務局によりさまざまなイベントが企画された。

特に、オープニングセレモニーとして開催されたバーチャルバンド演奏は、リンダウ会議の参加者によりオンライン上で共に“I Say a Little Prayer”を歌い、演奏する企画で、通常の学会とは一線を画すリンダウ会議独特の一体感を味わうことができた。

また、特定のプログラムという訳ではないが、ノーベル賞受賞者と若手研究者とがオンライン会議画面上に共に映し出され、対等に議論をしている光景は、リンダウ会議だからこそ果たせることであり、とても刺激的であった。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット[具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載してください。]

リンダウ会議参加に採択されたこと自体のみで、参加前から複数の研究者に激励の言葉など研究生活に欠かせない人脈形成の一助となった。

実際の会議では、今回はオンライン開催かつ自身の参加時間が限られたということもあり、国際的な人脈形成は叶わなかったが、おそらくは今後の研究生活においてリンダウ会議参加者と直接出会う機会があると考えられ、そうした際には参加者同士として交友関係を広げやすいと思われる。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた上記の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

「革新と貢献」、自身が研究を行う上で大切にしている言葉である。基礎研究の力で医学に革新的な進歩をもたらし、人々の健康に貢献するという目標を持っている。ノーベル賞受賞者たちは、正しくそうした「革新と貢献」を体現した良いお手本である。今回のリンダウ会議を通して、受賞者たちの研究内容だけでなく、「革

新と貢献」に近づくための姿勢・熱意を感じることができた。このことは自身の今後の研究生活において強いモチベーションとなっており、将来的な研究成果を出すための活力になると考える。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージ

採択されるまでに記載しなければならない事項などは多く、時間と労力が必要ですが、世界中のノーベル賞受賞者や若手研究者と触れ合える貴重な機会ですので、是非、チャレンジしてみることをお勧めします。今回はオンライン開催でしたが、次回以降に現地開催ができた際には今回の分も取り戻すような形でより一層の活気ある会になるのではないかと考えます。申請にあたり、何かお力になれることがあればご連絡ください。